

教材活用例(2) 「希望の花」

〔小学校高学年 主題：希望をもって 内容項目：1の(2)〕



(1) 開発資料の実際

ア 素材の説明

(ア) 素材の概要

〈素材—川尻浦久蔵^{かわじりうらきゆうぞう}—について〉

川尻浦久蔵は、江戸時代日本に初めて種痘法を持ち帰った人物である。しかし、当時の藩には相手にされず、持ち帰った種痘は没収されてしまい、国内で先駆けとなるはずだった種痘法を普及することはできなかった。

久蔵は、漂流をきっかけとして、様々な困難にぶつかった。それらに立ち向かって生き抜いてきたからこそ、種痘法に出会い、日本に持ち帰ることができたのである。

天明7年 (1787年)	川尻村に生まれる。
文化7年 (1810年)	新酒番船「観亀丸」に水主として乗り込み出発。
文化7年	嵐に遭い破船する。太平洋を漂流。
文化8年	ロシアのカムチャッカ半島に座礁する。
	医師ミハイラ先生と出会う。 凍傷の手術により、足の指を切断する。
文化9年	乗組員達が日本に帰る船が出航する。 久蔵一人、ロシアに残される。
	義足をつけて歩けるようになる。
文化10年	種痘法に出会い、久蔵も種痘法を行うようになる。
	種痘を持って日本に帰国する。

川尻浦久蔵^{かわじりうらきゆうぞう}の経歴

(イ) 4コマ絵

久蔵がぶつかった困難と、それによって種痘法に出会ったことを史実を基に整理した。そして、久蔵が困難を一つ一つ乗り越え、前向きに生きていこうとする場面を中心とし、起承転結を設定した。

	起	承	転	結
場面のイメージ絵				
絵の説明	漂流したロシアで吹雪の中をさまよひ、行き倒れた久蔵は仲間とロシアの人たちに救われるが、凍傷のため、足の指を切断する手術を受ける。	凍傷の手術をした足の傷が治っていなかったため、日本に帰ることが許されず、一人ロシアに残され、氣力を失う。	ロシアの高い医療技術を目の当たりにする。 ミハイラ先生の下で、種痘法を行うようになる。	種痘法に必要な道具をそろえて、日本に帰る船に乗る。

イ 資料の解説

【作成の要点】

学習指導要領解説には、「・・・様々な生き方への関心を高めるとともに、計画的に努力目標を立て、くじけずに希望と勇気をもって取り組み、その理想に向かって着実に前進していこうとする強い意志と実行力を育てる必要がある。その際、希望をもつことの大切さや挫折感を克服する人間の強さについて考えられるようにする・・・。」と記述されている。

主人公である川尻浦久蔵は、予期していなかった船の遭難から、さまざまな困難にぶつかる。しかし、それらの困難に一つ一つ立ち向かい、前向きに生きていこうとする強い意志と実行力があつた。さらに、種痘法に出会い、体の不自由な自分でも人のために役立つことができるという希望をもつことで、さらに意欲をもつことができ、前向きに生きていこうとする。

このような、川尻浦久蔵の生き方にふれることで、困難なことに出会っても希望をもって取り組んでいこうとする心情を育てていけると考え作成した。

また、川尻小学校のPTAは、「ふるさと川尻をこよなく愛し、川尻のために尽くそうとした人物がいたことを、子どもたちに語り伝えていきたい。」と絵本「川尻浦久蔵」を作成している。本資料を活用して学習を進めていく中で、川尻浦久蔵の気持ちや行動を支えた故郷川尻への思いにもふれさせていくこともできると考える。



【心に響くちょっといいはなし】

平成 16（2004）年、川尻小学校創立 130 周年という節目の年に、この物語を自分たちの手で子どもたちに語り伝えようという計画がもち上がり、PTA が絵を描いたり物語を編集したりして絵本を発行。低学年向けと高学年向けの本を作成している。

絵本発行に当たって、昭和60年に刊行された「花渡る海」の内容を参考になっている。

（その中に、天然痘予防接種をした部分がはれると小豆のように赤みをおび、小さな花のように見えたという件がある。このような状態になれば、一生天然痘にかからないということである。ちなみに、本資料の題名は、そのエピソードを基につけたものである。）

作者である吉村昭氏は、平成 16（2004）年 5 月 29 日の読売新聞の歴史エッセーで次のように語っている。

小学校の PTA の婦人達が、久蔵を主人公にした私の小説「花渡る海」（中公文庫）を読んで、郷土でも知られることのない久蔵をせめて小、中学生にも知ってもらおうとして絵本をつくった。文章も絵もよく、それらが小、中学生に贈られている。

久蔵は、初めて郷里でよみがえったのである。このような市井の婦人たちの行為が、日本の歴史をより豊かなものにしてゆく。「花渡る海」を書いた私としても、書いた甲斐があつたと思っている。

ウ 資料全文

「希望の花」

今から200年ほど前の江戸時代のことである。

久蔵^{きゆうぞう}たち船乗りを乗せた樽廻船^{たるかいせん}⁽¹⁾は、江戸を目指して旅立った。しかし、何日か過ぎた頃、海は荒れくるい、一番大事な舵^{かじ}が強い波にもぎとられてしまった。食料も水も少なくなる中、船は2ヶ月半の間、広い太平洋を流され続けた。ようやくたどり着いたところは、氷におおわれた国、ロシアのカムチャッカ半島⁽²⁾だった。

船乗りたちは、吹雪の中、助けを求めて歩き始めたが、そこは見渡す限り氷の平原でしかなかった。寒さのために次々と仲間が死んでいった。久蔵もとうとう一歩も歩けなくなり、氷のように冷たい雪に埋もれて体の感覚もなくなっていった。自分も死んでしまうのだとあきらめそうになる度に、故郷の景色や母の姿が浮かんでは消え、運よく仲間やロシアの人たちに助け出されるまで、なんとかふんばることができた。

しかし、雪の中に3日間も埋もれていた久蔵の足の指はひどい凍傷になっていた。ロシアの医師、ミハイラ先生に診てもらくと、凍傷^{ますい}になった足の指を切り取らなければ、全身が腐ってやがて死んでしまうと言われた。そのころの手術は麻酔もなく、想像を絶する痛みと苦しみをともなうものだった。久蔵は迷ったが、歯を食いしばり激しい痛みをたえ、右足の指2本と左足の指すべてを切り取る手術をうけた。

その頃、船乗りたちは、ロシアの船で日本に帰ることができることになった。久蔵も、日本に帰りたい一心で痛みをこらえ船に乗ったが、まだ傷口が完治していないことを理由に、一人船から降ろされてしまった。

翌朝早く、船の出発を告げる合図で目を覚ました。周囲を見渡したがだれもいない。自分一人が取り残された孤独感に、久蔵は顔を手でおおい、体をふるわせて泣いた。

それからというもの久蔵は、食事をとることもしなくなり、ただ横になっているだけの毎日が続いた。

そんなある日、天然痘^{てんねんとう}⁽³⁾の予防接種の話を目にした。当時、天然痘は世界中で恐れられていた伝染病だった。

「日本では、天然痘は、流行すれば多くの者が死んでしまう病気なのです。本当にそれを予防することができるのですか。」

異国の地ロシアであっても本当にそんなことができるとは信じられなかった。

「確かに、一度天然痘にかかると死ぬ可能性は高い。だからこそ予防をするのだ。」

真剣に話すミハイラ先生の言葉に興味をもった久蔵は、予防接種を見せてもらうことにした。

ミハイラ先生は、子どもたちに腕を出させ、次々と小刀で傷をつけてから薬を塗りつけ、布を巻いていった。

(これだけ?)

一生、天然痘にかからない方法だというので、大がかりなことをするにちがいないと思っていた久蔵は、あまりにも簡単な方法にあっけにとられてしまった。久蔵の故郷では、毎年、天然痘の流行がしずまるようにと大々的に祈とう⁽⁴⁾が行われていたことを思い出した。それでも、たくさんの人が天

然痘で命を失っていたのだ。

久蔵はその夜、ミハイラ先生の部屋に行き、あらためてその日見た天然痘予防の方法について尋ねた。その技術は、聞けば聞くほどすばらしかった。熱心に聞いていた久蔵を見て、ミハイラ先生は5日後の診察も見にくるようにと言った。

5日後、予防接種をした子どもたちが集まってきた。ミハイラ先生を見るなり泣き出す子もいたが、ミハイラ先生はおかまいなしに、その子たちの腕を出させ、見つめると、

「アニ ツベート（花が開いた）」

と笑顔で満足そうに言い、親たちとともに喜んでいた。

「花？」

久蔵も、子どもたちの腕を見せてもらおうと先日予防接種をした部分がはれて小豆のように赤みをおびていた。それはたしかに小さな花のように見えた。

「なぜ、そんなに喜んでおられるのですか。」

「子どもたちの腕にこの花が咲けば、子どもたちは一生天然痘にかからない。」

「それは本当ですか。ミハイラ先生、私にも予防接種の方法を教えてくださいませんか。」

「次に私が予防接種をするのを、よく見ていなさい。きっと君にもできるようになる。」

久蔵は体がふるえるのを感じた。

その日の帰り道、氷の溶け出した海に目をやった。故郷のおだやかな海とそこでくらす人々を思い浮かべながら、久蔵は固く口を結んでうなずいた。

それからというもの、久蔵は毎日ミハイラ先生のもとに通い、予防接種があると聞けば、助手として付き添い、大切なことをもらさないように見たり聞いたりメモに書きとめたりした。天然痘予防についての本も読んだ。そのうち、ミハイラ先生から許しを得て、久蔵も一人で予防接種ができるようになった。くり返し予防接種を行うと手際よくできるようになり、ロシアの人たちから「ドクトール キュンゾ（久蔵先生）」と呼ばれるようになった。

ついに、久蔵が日本に帰ることが決まった。久蔵の「故郷に持ち帰り、医者としてたくさんの人の命を救いたい」という強い思いに、ミハイラ先生は、予防接種に必要な道具をそろえてくれた。

いよいよ船出の時、久蔵の胸は高鳴っていた。そして、行く手に広がる、きらきらと輝く海をじっと見つめていた。

【注】

- (1) 江戸時代に、主に上方から江戸に酒荷を輸送するために用いられた廻船（貨物船）のこと。
- (2) ロシア連邦東部にある大きな半島。アジア大陸北東部に位置し、北北東から南南西に長く延びている。
- (3) 伝染力がきわめて強く、昔は大流行を繰り返して多数の死亡者を出した急性発疹性伝染病。
- (4) 修行によって得たと信じられる法力によって信者のさまざまな欲求を実現しようとする行為。

【参考文献】

吉村 昭（著）（1988）「花渡る海」中央公論新社

川尻町立川尻小学校 PTA（発行）（2004）「川尻浦久蔵」

川尻町誌編さん委員会・呉市史編さん委員会（編）（2007）「川尻町誌 資料編」

川尻町誌編さん委員会・呉市史編さん委員会（編）（2008）「川尻町誌 通史編」

エ 授業展開例 ー学習指導案（略案）ー

故郷への思慕を支えに希望をもって生きようとする久蔵の気持ちを考える展開
～ 心情曲線を活用した指導 ～

(ア) 主題名 希望をもって 1ー(2)

(イ) ねらい 天然痘の予防接種に出会った時の久蔵の気持ちを考えることを通して、希望と勇気をもって着実に前進していこうとする心情を育てる。

(ウ) 資料名 「希望の花」

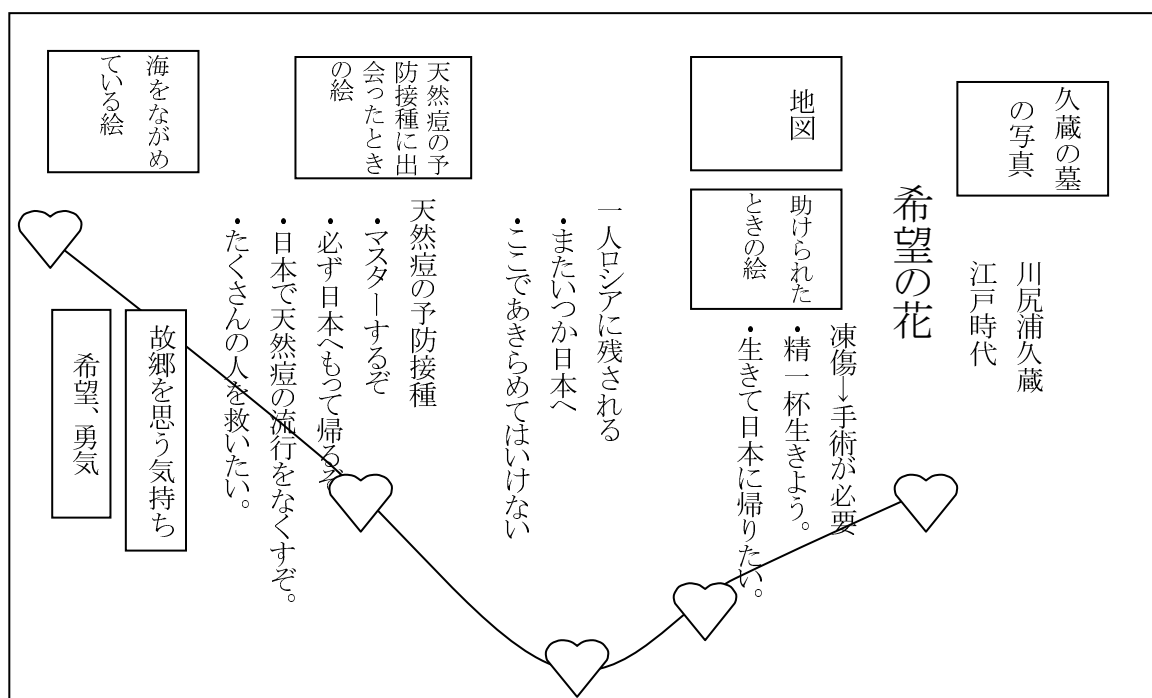
(エ) 学習指導過程

	学習活動	主な発問と児童の心の動き	留意点 (☆評価の観点)
導入	1 写真を見て、久蔵の存在について知る。	○ 1枚の写真を見てみましょう。 ・お墓の写真だ。 ・だれのお墓だろう。	○ 地域の方が今も大切に守っているお墓であることを伝え、久蔵のことを知らせる。
展開	2 「希望の花」を読んで考える。	○ 迷いながらも久蔵が、手術をすることを決めたのはなぜだろう。 ・死にたくなかったから。 ・精一杯生きよう。 ・生きて日本に帰りたい。 ○ 一人だけロシアに残され、ただ横になっているだけの日々を過ごす久蔵は何を考えていただろう。 ・もう生きる望みもない。 ・もう故郷をみることはないだろう。 ・これからどうなっていくのだろう。 ◎ 固く口を結んでうなずいたときの久蔵は、どんな気持ちだったのだろう。 ・天然痘の予防接種をマスターするぞ。 ・必ず、この方法を日本へ持って帰るぞ。 ・日本に帰って、天然痘の流行をなくすぞ。 ○ 行く手に広がる、きらきらと輝く海は久蔵に何を語りかけているのだろうか。 ・あきらめないでよく頑張った。 ・君の未来は希望にあふれているよ。 ・故郷に帰ってもしっかり生きていこう。	○ 場面絵や地図等を提示し、内容をつかめるようにする。 ○ 久蔵の気持ちを、心情曲線で表し、気持ちの変化が分かるようにする。 ○ 見知らぬ土地にただ一人残され、絶望感から生きることへの希望を失いどん底にある久蔵の心情をしっかりとさえる。 ○ 久蔵の故郷への思いが久蔵の希望や勇気を起こさせたことに気付かせる。 ☆ 心情曲線を板書することにより、久蔵の気持ちの高まりをつかみ、自分なりに思考を深めることができたか。
	3 生活を振り返って考える。	○ くじけずに頑張ってよかったなと思うことはありませんか。	○ 努力には、強い心や周囲の人などの支えがあることに気付かせる。
終末	4 教師の説話を聞く。		○ 教師の体験談を話し、生活へと広げる。

(才)資料分析表

資料場面	登場人物の行為・心情		主人公の心情（久蔵）	児童の意識の流れ
	中心人物（久蔵）	その他の人物（ミイコ先生）		
○漂流したロシアで吹雪の中をさまよひ、行き倒れた久蔵が仲間とロシアの人たちに救われる。	・雪に埋もれてしまい、故郷を思い出しながら、もう死んでしまうのだとあきらめそうになるが、故郷や母の顔を思い浮かべふんばる。 ・仲間とロシアの人たちに助け出されたが、足の指が凍傷になっていた。		雪の中からの救出 ・生きて故郷に帰らなければ。 ・生きていてよかった。	○助かってよかったな。
○凍傷のため、足の指を切断する手術を受ける。	・迷いが、手術することを決心する。	・凍傷について伝え、手術を行う。	手術を決心 ・死にたくない。ミイコ先生を信じてみよう。	○よく決心したな。
○足の傷が治っていないかったため、日本に帰ることが許されない。	・一人船から降ろされ、船の出発の合図を聞きながら、孤独感を感じる。	・落ち込んでいる久蔵を何度も励ます。	一人ロシアに残る ・みんなと一緒に日本へ帰りたい。 ・このまま死んでしまった方がましだ。	○故郷に帰ることができなくて、かわいそうだな。頑張ってほしいな。
○天然痘の予防接種があることを知り、ミイコ先生の下で、接種法を行う。	・接種法について知り、日本にこの医術を伝えたいと希望を持ちながら、自分で予防接種をするようになる。	・接種法について教える。	接種法を知る ・接種法を学ぼう。 ・接種法を日本へ持ち帰りたい。	○故郷のことを思っていて頑張ったんだな。目標を持つことで、人は頑張ることができるんだな。
○接種法に必要な道具をそろえて、日本に帰る船に乗る。	・接種法に必要な道具をそろえてもらい、乗組員々と出航する。	・接種法に必要な道具をそろえて持たせる。	帰国 ・故郷に持ち帰りたい。だれも人の命を救いたい。	

(力) 板書例



【板書の構成】

場面絵や地図等を示しながら、久蔵に降りかかった困難を場面ごとに整理して板書する。それぞれの場面で、久蔵の「心の温度」について考えさせハートを板書していく。そのハートをつないで心情曲線に表し、心情が高まったときに、故郷を思う気持ちが支えとなっていたことを感じ取らせる。

(キ) ワークシート

希望の花

☆固く口を結んでうなずいたときの久蔵は、どんな気持ちだったのだろう。

年 組 (

)

Handwriting practice area with seven vertical dashed lines for writing.



(2) 活用のポイント

本資料には、主人公である川尻浦久蔵が、予期していなかった船の遭難から、次々とぶつかる様々な困難に、一つ一つ立ち向かい、前向きに生きていこうとする実行力が描かれている。

久蔵は、自分の生き方について明確に目標を立て、それに向かって生きていたわけではない。しかし、漂流したロシアで種痘法に出会い、体の不自由な自分でも人のために役立つことができる、そしてその技術を日本へもち帰りたいという思いから、希望をもち、前向きに生きていこうと努力した。特に、絶望に打ちひしがれる久蔵がみせる人間の弱さは児童にとって共感しやすいものとする。また、そこから希望を見出す久蔵の姿（心の動き等）から、児童に希望をもつことの大切さや挫折感を克服する人間の強さについて考えさせることは、自分の夢や希望が膨らんでくる時期の児童にとってよい機会となるものとする。

そこで、次のような工夫を取り入れた。

ア 発問の工夫

久蔵が、くじけそうになりながらも故郷のことを思いながら前向きに進んでいこうとする場面を取り上げて発問することで、久蔵の生き方への関心をもたせていきたい。

特に、中心発問では、種痘法に出会って希望をもつ久蔵の姿をより深く考えさせるために、故郷への思いが久蔵の希望や勇気を起こさせたことに気付かせていきたい。

イ 心情曲線を活用する工夫

久蔵は、くじけそうになりながらも、故郷の景色や家族を思い出すたびに、希望をもち立ち上がろうとする。その心情の変化を「心の温度」として考えさせ、ハートを板書していくことで分かりやすくまとめる。さらに、そのハートを線でつなぎ心情曲線を完成させることにより、久蔵の気持ちの高まりをつかませ、自分なりに思考を深まらせていきたい。

ウ 資料を提示する工夫

本資料は、久蔵の様々な困難を描くため多くの場面が登場する。また時代背景も久蔵の気持ちを考えるためには欠かせない。

したがって、資料を短時間で分かりやすく理解

させるために、久蔵の絵本の中から挿絵を活用し、紙芝居のように提示しながら読んだり、地図を活用したりするなどの工夫が考えられる。

また、児童の反応を見ながら、理解しにくいところには注釈をいれながら資料提示をすることも大切である。

エ 書く活動の工夫

中心発問においては、ワークシートに書く活動を取り入れ、希望を見出したときの久蔵の気持ちについて、十分に時間をとって書かせたい。そのことにより、児童が自ら考えを深めたりする機会としたい。

(3) 授業の実際

ア 発問の工夫

久蔵は、あまり知られていない人物であるため、導入では、久蔵の墓の写真を提示し、人物や時代背景に迫っていった。その際、子孫のない久蔵ではあるが、地域の方が大切に守っていることを知らせることで、身近に感じさせることができた。

展開では、様々な困難に立ち向かう久蔵の姿に共感させるために、久蔵がくじけそうになった場面を基本発問として取り上げた。心情曲線を活用するために、まず、場面ごとの久蔵の気持ちを「心の温度」に表させた。ハートを動かしながら自分が思うところで挙手させ、その理由を言わせることで、久蔵の気持ちを考えさせた。しかし、くじけそうになったとき、それを克服して努力するときの久蔵の気持ちを対比させようとする、発問が多くなり、時間不足となった。そのため、基本発問は、故郷を思う久蔵の気持ちが引き出せるものに整理し、補助発問を行うことで対比ができるようにした方がよかった。

中心発問については、天然痘の予防接種ができることを知ったときの久蔵の気持ちや久蔵が進んで天然痘の予防接種をするようになった理由を発問したが、「みんなを助けたかった」「この技術を広めたい」など、努力していこうとする前向きな意見は出るものの、その技術のない日本へ持ち帰ることを夢見て努力する久蔵の思いになりにくかった。そこで、海を隔てた日本への思いを感じさ

せるように、海を眺める久蔵の姿を資料に加え、その思いを中心発問で問うことで、故郷に対する久蔵の思いにも迫ることができるのではないかと考えた。

展開後段や終末では、単に体験談に終わることのないように留意し、くじけずに努力したときの思いを振り返らせたり、それを支えてくれる人がいたことに気づかせたりすることで、「がんばろう」という気持ちがあれば変わる」「どんなにつらいときでも支えてくれる人がいる」などの感想をもたせることができた。

イ 心情曲線を活用する工夫

久蔵の心情に迫るために、場面ごとに久蔵の「心の温度」を考えさせた。久蔵の心の温度を上げたものは何だったのかと問い返すことで、その時の久蔵の強い思いや心の支えとなった故郷についてふれることができた。しかし、資料の中にもたくさんの困難があり、その都度詳しく聞いていくと、時間がかかりすぎてしまった。そのため、焦点を絞って発問し、その前後の心情について対比させるような切り返しをしていくことで、関連させた発言を引き出せるのではないかと感じた。

ウ 資料を提示する工夫

時代背景もあり、内容がつかみにくいため、地図を用意したり、川尻小学校のPTAが作成した絵本の挿絵を見せながら資料を読み進めていくことで、場面場面の状況がつかめるようにした。また、資料を読みながら、わかりにくいところには注釈を入れるなどしていくことで、理解しやすくなった。しかし、資料そのものが長いため、資料提示だけで時間がかってしまった。資料提示は、挿絵をもとに内容把握ができるようにして、詳しく説明をしたいところは、発問をしたとき等にするのもよいと感じた。

エ 書く活動の工夫

中心発問について考えさせるところに、ワークシートを用意した。授業では、天然痘の予防接種ができることを知ったときの久蔵の気持ちや久蔵が進んで天然痘の予防接種をするようになった理由について書かせたので、予防接種だけに絞られた意見が多かった。

授業の終わりに、振り返りとして学んだことや

考えたことも書かせた。ほとんどの児童が、あきらめずに希望をもってがんばることの大切さについて書いていた。また、地域に久蔵のような先人がいたことへの驚きや誇りについて書いている児童もみられ地域教材を扱うことの大切さも感じた。

(4) 各教科等（体験活動を含む）との関連

久蔵は、鎖国が行われていた江戸時代に生きた人物である。当時、異国の地を踏むことは犯罪であり、再び日本へ帰ることは死をも意味する。そのような時代の中で、久蔵がロシアで経験した出来事は、想像を遙かに超えるものであったに違いない。

しかし、久蔵は故郷を愛し、故郷を思いながら、新しい医術と向き合い、その技術を故郷に帰って発揮しようとする。

時代背景を踏まえた上で、久蔵がぶつかった困難や前向きな態度について考えられるよう、本資料を学習する時期は、社会科で江戸時代の鎖国について学習した後に実施することが望ましい。

また、資料は天然痘の予防接種について知り、胸躍らせる久蔵を中心に描いているが、資料には書ききれなかったエピソードがたくさんある。そこで、総合的な学習の時間に地域の先人調べを行うことで、道徳では知り得なかった久蔵の人生を調べていくこともできる。

(5) 心のノートを活用

ア 展開での活用

「心のノート」PP. 18-19の「目標に向かう道にはいろいろなことがある」の図を活用し、板書の心情曲線と比較しながら、久蔵が乗り越えた困難や、それを乗り越えることができた理由について考えさせることができる。

また、展開後段で、「わたしが学びたい人物」について書かせることもできる。

イ 中学校の心のノートの活用

中学校の「心のノート」PP. 24-25に「努力することってすばらしい」という、目標に向かうくじけない心についてまとめたページがある。くじけそうになったときに何が必要なのか、久蔵にとっては何が支えになったのかと考えさせるための資料として増刷りして活用することもできる。